

午後六時、早々に仕事を終えた私は、繁華街へと吸い込まれていくサラリーマンたちとは反対方向に足を向けた。人波に逆らうように住宅街へ入っていくと、喧騒がすうつと遠のいていく。

かばんの中でスマホが震えた。取り出すと、画面に表示されたのは見慣れた名前——今日からちょうど三ヶ月前、私の恋人になった人からのメッセージだった。

『総司…今日は華ちゃんの好きなオムライス作って待ってるね』

（今日はオムライス……!）

思わず口元がほころぶ。小躍りしたい衝動をどうにかこらえながら、スマホをぎゅっと握り締めた。足が自然と速まる。

二、三分も歩いただろうか。住宅街の一角に、こじんまりとした白壁の建物が見えてきた。看板には『カフェRepos（ルポ）』とある。間口は狭く、

通りすがりにはただの民家と見紛うほど目立たないけれど、扉のそばには小さなブラックボードがあつて、その日のコーヒーの産地と、手書きの一言が添えられている。常連たちがそれを楽しみにしているのを、私はもう知っていた。

ドアには『Close』の札がかかつていた。それでも躊躇わずに手をかけると、わずかに開いた隙間からバターの芳醇な香りがふわりと漂つてきた——と同時に、こちら側に引き寄せられる感触。向こうから、そつとドアを開けてくれていた。

「華ちゃん、おかえり」

降つてきた声に、上を見上げる。高い鼻梁、くつきりとした目元、そして今はわずかに細められた琥珀色の瞳。形のいい唇が柔らかく弧を描いていた。百八十五センチの長身に、緑色のエプロンを纏つた宇多川総司（うたがわそうじ）さんが、そこに立っていた。

「総司さん！……ただいま、です」

まだ慣れない帰宅後の挨拶に、じわりと顔が熱くなる。なんだか恥ずかしくて目を逸らすと、「可愛いなあ」という低い声とともに、くすくす笑う気配がした。

柏木華（かしわぎはな）、二十四歳。私には三ヶ月前から、恋人がいる。

出会いはもう一年半ほど前になる。ふらりと立ち寄ったのがこのカフェ、『Repos（ルポ）』だった。住宅街の奥まった場所にひっそりと構えていて、小さな看板しかなくてネットにも載っていない。仕事で煮詰まったとき、偶然辿り着いたのがここで、扉を開けた瞬間に「あ、ここは好きだ」と直感した。焙煎の香り、静かなジャズ、磨き上げられたカウンター。常連らしき顔ぶれが思い思いに本を読んだりコーヒーを味わったりしていて、それがまた心地よかった。

そして、その店主が宇多川総司（うたがわそうじ）さんだった。

初めて来た私に、私という人間を見てコーヒーを選んでもくれたこと、帰り際、「またいつでもどうぞ」とだけ言つて、それ以上ひとことも引き留めなかったこと。常連さんたちの好みをすべて把握していて、誰にでも同じ温度で接していること——そういうことのひとつひとつが積み重なつて、気づいたら毎週通つていた。

そんな総司さんは、恋人になつてから、私にとびきり——甘い。

仕事帰りにこうしてご飯を作つてくれるし、デートのときはいつもお会計を全部出してくれるし、荷物もさりげなく持つてくれる。寒い日は私が「寒い」と言う前にコートを貸してくれる。まさに『スパダリ』という言葉がぴつたりなくらい、彼は私を愛してくれていて、私はいつも愛を返すのに必死だった。

（あー……、今日もかつこいいなあ）

カウンターに腰掛けて、オムライスの準備をする総司さんを見つめる。私の目線に気づいた総司さんはカウンターの向こうで目を細めると、また視線を自分の手元に戻した。長い睫毛が伏せられて、ケチャップのボトルを持つ指先が小さなオムライスの上でゆつくりと動いている。真剣な横顔で、何かを書いていた。

「でーきた。はい、華ちゃん。召し上がれ」

「わあ……！ 可愛い！」

カウンター越しに差し出されたお皿を見ると、オムライスの上に、ケチャップで描かれた猫がいた。まんまるの顔に小さな耳、ちょこんと添えられたしっぽ。周りにはハートがいくつか散っていて、見ているだけで頬が緩む。

スマホを取り出して写真を撮っていると、キッチンから出てカウンターをぐるりと回り込んだきた総司さんが、隣の椅子に腰を下ろした。彼のオムライス

に目をやると、ケチャップがぎつくりと一直線に引いてあるだけだ。猫ちゃんのオムライスは私だけの特別なんだと思うと、また胸が温かくなる。

「この猫ちゃん、可愛いすぎて食べるのがもったいないですね……」

「ふふ、気に入ってもらえたならよかった。猫も華ちゃんに食べられたいつて言ってるよ？」

スプーンを入れると、とろりと半熟の卵が割れた。ひとくち運んだ瞬間、ふわりとバターの香りが広がって、やわらかな卵とケチャップライスの甘みがじんわりと口の中に溶けていく。

「……！ 美味しい！」

思わず目を閉じて、オムライスの味を堪能する。こんなに丁寧に作ってもらったものが美味しくないわけがないけれど、それでも毎回、ちゃんと感動する。目を開けると、総司さんがこちらを見て柔らかに笑っていた。

「そんなに美味しそうに食べてもらえると、作りがいがあるね」

「だって、本当に美味しいんですもん。私、総司さんが淹れてくれるコーヒーも好きですけど、ご飯も毎回美味しくて……!! オムライスはカフェのメニューに入れないんですか？」

「うーん、華ちゃんがそんなに喜んでくれるなら入れてもいいかもしれないな」

ふふつと笑いながら、総司さんも自分のオムライスにスプーンを入れた。他愛のない話をしながら食べるこの時間が、一週間の中で一番好きかもしれない、とぼんやり思う。今日あった仕事のこと、カフェの新しい仕入れ先のこと、昨日読んだ本のこと。とりとめのない話でも、総司さんとならどんな話でも楽しい。

「……ふう、ごちそうさまでした。今日もすごく美味しかったです!」

「それならよかった。……あ」

おもむろに、総司さんの指が私の口元へと伸びてくる。思いがけず縮まった距

離に、心臓がどきりと跳ねた。端正な顔がすぐそこにあつて、琥珀色の瞳がまっすぐこちらを見ている。息をするのも忘れそうになりながら次の言葉を待っている――。

「……口の端にケチャップついてたよ、可愛いなあ」

「え!？」

（……は、恥ずかしい。てつきりキスされるかと思つた……）

「そういうことは上にあがつたらね？」

私の考えなんて全部お見通しだというように、総司さんが低い声で言う。耳まで熱くなるのを感じながら「……意地悪ですよ」と呟くと、「意地悪じゃないよ」と涼しい顔で返ってきた。

「あ、そうだ。今度カフェで出そうと思つて新しいケーキがあるんだけど。試食してみてくれない？」

「……食べたいです!」

運ばれてきたのは、薄いクレープ生地を何層にも重ねたミルククレープで、あまりの美味しさに気づいたらぺろりと平らげてしまっていた。そんな私を見て、総司さんは「メニューに追加決定だね」と静かに笑った。

それから二階にあがって、シャワーを浴びて。総司さんの家に置かせてもらっているパジャマに袖を通したところには、外はすっかり暗くなっていた。

「華ちゃん……、ちゅ……」

「総司さ……、んむ……ッ♡」

総司さんのベッドに沈みながら、私は目の前の顔を見上げた。総司さんの横髪が時折、頬をかすめてくすぐつたい。

キスに夢中になっていると、総司さんの指がパジャマのボタンにかかった。ゆっくりと、ひとつずつ。焦らsumたいに丁寧に暴かれていくのが、かえって恥ずかしい。

「あ……ッ♡」

ブラジャーのホックを外されて、窮屈そうに収まっていた胸がぷるん♡とこぼれ落ちた。少しでも背中を浮かせると、するとブラジャーごとパジャマの上を取り払われて、素肌が外気に触れる。

「寒くない？ 大丈夫？」

「……大丈夫、です」

身体が火照って、熱いくらいだった。だけど、こうして気遣ってくれる彼の優しさが嬉しかった。

総司さんは華奢な私の身体を愛おしそうに見つめながら、自身のシャツのボ

タンを慣れた手つきで外していく。下着一枚になった彼に見下ろされ、その逞しい胸板を目の前になると、それだけで心臓がトクトクと跳ねた。

「……ひぁッ♡」

彼の大きな手が、私の乳房を下から持ち上げるようにふにふに♡ と優しく揉みしだいていく。

「あー……、いつ見ても綺麗なおっぱい……。形もいいし大きくて弾力もあって……。乳首もピンク色で……。綺麗だ」

くにッ♡ くにくに……。ッ♡

「ああんッ♡ ん、ひう……。ッ♡」

真ん中の、すでにぷっくり♡ と小さく尖った乳首を親指と人差し指で摘み上げられて、左右に転がされる。甘く鋭い刺激に、身体の芯に熱が灯つていき、背中が自然と弓なりに反った。

「あ……ッ♡ うう……ッ、んうッ♡」

「華ちゃん、おっぱいもうこんなに真っ赤に勃ってる……♡ ああ……、ぴくぴく震えてて可愛い♡ ……はあ♡」

温かい息が胸にかかったと思ったときには、右側の乳首が総司さんの熱い口内に吸い込まれていた。

「ああ……ッ！♡ そう、じさ、あ……ッ♡ んん……ッ♡」

突起を吸い上げられながら、硬い蕾を口内でピンッ♡ ピンッ♡ と舌先で弾かれる。右胸は彼の熱い舌が、左胸は彼の指先でねっとり握ねられる。二箇所から同時に押し寄せる快感に、下腹部がじくじく♡ と重たく疼き始め、私は耐えかねてぴったりと両膝を擦り合わせた。

「……はッ、可愛い♡ 華ちゃん、気持ちいい？」

「……うう♡ きもち、いいです、う……ッ♡ あッ♡」

胸への刺激にびくびく♡ と身体を震わせていると、ショーツごと下のパジャマも膝下まで引き落とされてしまった。すでに潤みきったおまんこから溢れ出た蜜が、銀色の糸を引いて、ショーツから離れていく。

(うう……、私、もうこんな……♡)

「もうパンツすごいことになってるね？ おまんこがどのくらい濡れちゃったのか、確かめてみようか」

「や、あう……♡」

総司さんの指が太ももに触れて、大きな手が壊れ物に触るように、優しく這い上がってくる。その触れるか触れないかくらいの繊細なタッチに、身体は面白いくらいに反応して、太ももが自分の意思に反してびくびく♡ と小刻みに震えてしまう。

「あ……♡ う、あ……♡ ……ッ♡ ひや、あ……♡」

ぐちゅり♡ と、総司さんの指が私の潤みきつた蜜壺に辿り着く。そのまま蜜を掬うように穴の周りをくるくる♡ となぞられたかと思うと、彼の指はそのまま、敏感に腫れ上がった秘豆を優しくなぞりあげた。

「ひゃあんッ!!♡」

「こんなに濡らして……。華ちゃんは可愛いね。ちゅ……」

再び彼の熱い唇が近づいてきて、私の唇を塞ぐ。ちゅ……。♡ ちゅぽ♡ と音を立てながらキスをされている間もクリトリスをくるくる♡ となぞられて、塞がれた口の奥から声が漏れ出した。

「んむうッ♡ ……あ、ああッ♡ は、あ……んああッ♡」

「……は、あ♡ クリトリスもすごく硬くなってる。もっとしてあげるからね」

そう言うとともに、総司さんは上体を起こし、私の膝をぐいっと左右に押し

広げた。潤みきった秘部を総司さんに見せつけるような格好になってしまつて、羞恥に顔が赤くなる。

「あ……♡」

（うう……♡ おまんこ舐められちゃうんだ……♡ 濡れすぎてて恥ずかしいのに……♡）

だけど、この恥ずかしさの先にどんな快感が待っているのか、私はもう知つてしまっている。

総司さんの綺麗な顔が、ゆっくりと私のみつともなく開かされたおまんこに近づいていく。温かな吐息を感じた瞬間、ちゅうッ♡ と敏感なクリトリスを深く吸い込まれて、腰がビクンッ♡ と跳ねた。

「あああッ♡ んあッ、あ、あ♡」

（クリトリス吸われちゃつて……ッ♡ あ、吸いながら舌でぐりぐり♡ す

るのだめなのにい……ッ♡

「……ちゅぱッ♡ 華ちゃんのクリトリス、ひくひくしてて可愛い……♡ ナカもちゃんとほぐしておこうね……♡」

「え、あッ♡ ん、ふうう……ッ♡ そうじさ、あッ♡ りょうほうだめ、えッ♡ やッ♡ ンああッ♡」

総司さんの綺麗に切り揃えられた爪が、私のおまんこにゆつくりと割り入った。すでに期待で濡ればそつていた蜜壺は、ぬぷぷ……ッ♡ と容易く彼の指を飲み込んでいく。

膣襞の感触を一つずつ確かめるようにゆつくりと進んだ彼の指が、そこだけ他とは違う、ざらついた場所をいとも容易く探し当てた。そのまま、そこを指の腹でそつと優しく押し上げられると、膣から全身へ甘い痺れが駆け巡る。

「……ッ！♡ ひ、うッ♡ そうじさ、あッ♡ そこ……ッ♡」

「ああ……、気持ちいいね。華ちゃんのナカ、ぎゅうぎゅう♡ に締まって俺の指を締めつけてきてる……♡」

「あ……ッ♡ だめ、だめ、え……ッ♡ わたしッ、んう……ッ♡ これ、すぐ、う……ッ♡ あああッ♡ ひあ、あ……ッ!!♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅ……ッ♡ ぢゅるるるるッ♡

（あ、だめだめッ♡ クリ舐められながらナカ掻き回されたら……ッ♡ きちやうッ♡ ああ……ッ、くる、う……ッ♡）

「……ッ!!♡♡」

頭が真っ白になって、腰がビクンッ♡ ビクンッ♡ と思いつきり跳ね上がった。膣がぎゅうぎゅう♡ にうねって、絶頂の衝撃に耐えるようにたつぷりと蜜を吐き出した。

「あ、あ……♡ そうじさ、ん……♡」

熱い吐息を漏らしながら、波打つ快感にただただ身を委ねる。総司さんは身体を起こすと、私の頭をそつと愛おしげに撫でてくれた。大きな手の温もりが心地いい。

そんな甘い余韻に浸っているうちに、総司さんは身につけていた下着を無造作に引き抜いた。

その下から現れたのは、腹につくほどそり返った、総司さんの猛々しい屹立。端正で綺麗な顔にはおよそ不釣り合いな、ただ彼の大きな体格を証明するようなそれは、ビキビキ♡と赤黒く脈打ちながらそり立っている。

（わ、あ……♡ 何回見ても、おつきい……♡）

恐ろしいほどの存在感を放つそれに、私は恥ずかしさも忘れて、ただ圧倒されて見入ってしまう。ゴクリ、と喉が鳴った。

彼がその大きなおちんちんに、『XLサイズ』とパッケージに書かれたコン

ドームをつけていく様から、目が離せない。これがこれから私のナカに挿入してくるのを想像するだけで、じゅわ……ッ♡ と熱い蜜が溢れ出した。

私の視線に気づいたのか、総司さんと目が合う。彼はいつもの穏やかな笑みを少しだけ崩し、情欲を湛えるような、どこか仄暗い笑みを浮かべた。

総司さんは再び私の足を大きく割り開いて、熱を帯びた巨大なそれを股の間にあてがった。

「……ッ♡」

薄い膜越しに、どくどくと脈打つ屹立の圧倒的な熱量を感じて、腰がびくり♡ と跳ねる。

「華ちゃん、挿れるよ」

余裕もなく、かろうじてこくこくと頷くと、シーツをぎゅつと掴んでいた私の左手を、総司さんの大きい手のひらが上から優しく包み込んだ。そのまま指

を深く絡ませて力強く握り締められるのと同時に、質量のある剛直が、膣内を
みちみち……ッ♡ と押し広げながら侵入してくる。

——ぬぶぶ……ッ♡

「う、あ……ッ♡」

（お、つきい……♡ 挿入ってきたあ……ッ♡）

膣壁を限界まで押し広げるように、ゆっくりゆっくりと総司さんは腰を進め
る。亀頭がすっぽりと膣内に収まると、張り出したカリが膣襞を一つずつごり
♡ ごり……♡ とこそげていって、お腹の奥に重たい熱が溜まっていく。

「華ちゃん、息吐いて……。うん、そう。ゆっくり力を抜いて」

この存在感には、何度肌を重ねても慣れることができない。あまりの大きさに息を詰まらせる私を氣遣うように、総司さんは繋いだ手の親指で、私の手の甲を優しくさすさすと撫でてくれる。

「そうじ、さ……♡ んう♡ ふ、う……♡♡ ふ……♡♡」

「そう、上手だよ……、華ちゃん。そのままゆつくり息をして……。うん、いい子♡ このまま奥まで挿れるね……♡♡」

「あ……♡ う……♡♡ は、あ♡♡」

ぐ。ふ。ふ。……♡♡ とちゅん♡♡

総司さんの肉棒が、ついに私の最奥の壁に突き当たった。はち切れんばかりに膨れあがった亀頭で子宮の入り口を優しく、けれど重くノックされて、膣がぎゅうう♡♡ と締まった。

「華ちゃん、好きだよ」

「あ……♡」

総司さんは私の上に覆い被さって、その大きな身体で抱きすくめてくれた。

彼の鍛えられた分厚い胸板に押し潰され、汗ばんだ素肌同士が隙間なくびつた

りと重なり合う。

胸の奥から響いてくる、いつもよりずっと早くて力強い彼の鼓動。それを肌越しに感じて愛しさに胸が締め付けられた瞬間、総司さんがゆつくりと腰を動かした。

ぬぽ……♡ ぬちゅ……♡ ぬちゅぬちゅ……♡

「あ、う……♡ そうじ、さ、あ……♡ あ、んうう……♡」

彼の太すぎる剛直がナカを往復するたびに、頭が蕩けていき、おまんこからとめどなく蜜が溢れ出す。快感でバラバラになりそうな意識を必死に繋ぎ止めようと、私は総司さんの首に腕を回してしがみついた。すると、それに応えるように先ほどよりも強く抱きしめられ、少し息苦しいほどに身体を圧迫される。けれど、その強引なまでの力強さすら今はひたすらに心地よかった。

「く……♡ 華ちゃんのナカ、狭くて気持ちよすぎ……♡ 華ちゃんも気持ち

いい……?」

総司さんの切なく歪んだ声が耳元で聞こえてきて、その吐息すらもぞくぞくとした甘い痺れとなつて全身を駆け巡る。

「……ッ♡ きもち、いい……、です……ッ♡ おかしくなりそ……ッ♡ ん、ふうう……っ♡ ああッ♡」

私が蕩けた声でそう言うと、私のナカを埋め尽くしていた総司さんの剛直が、ずくんッ♡ とさらに一回り熱く膨張した。

「やッ、ああッ♡」

私の言葉に彼が興奮してくれたのだと肌で伝わってきて、私もまた全身がかつと熱くなる。

これ以上ないほどみっちりと埋まっていた剛直が、膣内でさらに隙間なく密着し、逃げ場のない快感に膣もまたぎゅううッ♡ と締まっていく。

ずちゅずちゅずちゅッ♡ とちゅとちゅとちゅ……ッ♡

いよいよ脳裏でぱちぱちと激しい火花が弾け始める。膾壁がぎゅうッとうねって、総司さんの剛直を奥へ奥へと引き込もうと必死に甘える。

「あー……、可愛い♡ 身体びくびく震えて呼吸も荒くなってきた……♡ 華ちゃん可愛い♡ イクところ、俺に見せてよ」

「や、あ……ッ♡ あ、あうッ♡ わた、し……ッ♡ もう、あ、イクッ♡ いつちや……ッ、うう……ッ!!♡」

思いつきり背中をのけ反らせて、身体を激しくビクンッ♡ と震わせる。頭の方から足の指先までもが燃えるように、熱い。

「く……ッ、すごい締まつてる♡ 持ってかれそ……。きもちーね、華ちゃん」
「うう……ッ♡」

私の痴態をうつとりと眺める総司さんと目が合ってしまう。いつもは涼やかな

琥珀色の瞳が、今だけは深い情欲を湛えていて、胸の奥から甘くむず痒いような幸福感が込み上げる。

総司さんの手が私の頬に触れて、そつと撫でた。絶頂を迎えたばかりの身体はそんな何気ない愛撫でさえも過敏に拾い上げてしまつて、ビクリ♡と腰が跳ねる。

「華ちゃん、俺もそろそろイクね？ もう少しだけ頑張れる？♡」

鼓膜を蕩かすような甘く低い声で問われ、私は瞳を潤ませながらこくりと頷いた。

とちゅとちゅとちゅ……♡　ぢゅこぢゅこぢゅこ……♡

「あッ、お……♡　しゅごいい……♡　あうう……♡」

いったばかりで狭くなった膣壁を、総司さんの剛直が無理やりこそげるように大胆にピストンする。吐精を目前に控えた、子宮口まで届いてしまいそうな激

しいピストンに揺さぶられながら、私もまた抗えず快感を食った。

（こんなに激しく突かれたら……ッ♡ ああ……ッ♡ またお腹の奥が熱くなつてえ……ッ♡）

「そうじさ、あ……ッ♡ またくるッ♡ またあッ♡ イク♡ イクうッ♡」

「く、俺も……ッ♡ 華ちゃん、一緒にイこう……♡」

もう言葉を返す余力すら残っていないくて、私はただ必死に総司さんの逞しい腕をきつく掴んだ。

ぢゅぽぢゅぽぢゅぽッ♡ ごちゅごちゅごちゅ……ッ♡♡

「らめッ♡ んああ……ッ!!♡ イク、イック♡ つああ……♡」

「……出るッ♡」

——ごちゅんッ♡

ビクビクビクッ♡ びゅるるるッ♡ びゅくッ♡

「う、あ……ッ♡ んん……ッ♡」

（ああ……ッ♡ すっごい♡ お腹の奥あつといい……ッ♡ 総司さんのおちんちん、ナカでびくびくして、え……ッ♡）

小刻みに身体を痙攣させながら、薄い膜越しに総司さんが放った熱い飛沫をお腹の奥でしっかりと感じ取っていた。

おまんこが本能的に彼自身を絞り上げようとしてぎゅう♡ ぎゅう♡ に締まる。彼の剛直もまた、びくん……ッ♡ びくん……ッ♡ と力強く脈打っている。

「……くッ。は、あ……♡ 華ちゃん……」

視線を絡め合わせ、お互いの快感を分け合うみたいに唇を重ねる。舌を絡め合い、熱を吸い合いながら、ただただ快楽の余韻に身を委ねた。

しばらくそうした後、総司さんが名残惜しそうにそつと唇を離れた。もう一

度だけ、私の目を見つめて触れるだけのキスを唇に落としてから、彼はゆつくりと身を起こす。

吐精したはずなのにいまだ硬さを失っていない剛直がナカからゆつくり引き抜かれる。

「ん……♡」

カリが膣壁をぞりぞり♡ と擦つていく感触に身を震わせながら、私は力が入らず、シーツに沈んだまま動くことができなかった。

（私も、動かなきゃ……）

そう思うのに、甘い気だるさに支配された身体はちつとも言うことを聞いてくれない。コンドームを処理しているのだろう、総司さんがベッドから下りてこそごとと動いている気配を遠くに感じながら目を閉じていると、やがてベッドがギシッと軋んだ。

「華ちゃん」

私を呼ぶ優しい声にそつと目を開けると、総司さんが蓋を開けてペットボトルを差し出してくれていた。彼の手を借りてゆつくりと上半身を起こすと、そのまま引き寄せられて、総司さんの汗ばんだ逞しい胸板にそつと頭を預ける形になる。

「ありがとうございます……」

「冷たいからゆつくりね？　飲ませてあげようか」

「そつ、それは大丈夫です……！」

総司さんから水を受け取ると、ひんやりとした冷たさが火照った手に心地よく伝わってきた。そのまま一口飲み込むと、冷たい水が喉を通っていく。

「ちよつとごめんね」

総司さんはそう一言断りを入れると、ベッドサイドからティッシュを取り出し

た。私の下腹部に伸びてきた手が、秘部を優しく拭ってくれる。くすぐったくて、思わず変な声が漏れてしまった。

「ん……ッ」

「ふふ、可愛い声」

恥ずかしさに身をすくめると、こめかみに優しいキスが降ってきて、心臓がとくとんと跳ねた。

（い、至れり尽くせりすぎる……っ）

好きな人と付き合えただけでも奇跡のようなことなのに、その彼がこんなにも私を宝物みたいに大事にしてくれるなんて。いまだに夢を見てるんじゃないかと胸がいつぱいになる。

「そんなことまですみません……、ありがとうございます」

「そんなの当然だよ。俺の方こそ、一緒にいてくれてありがとう」

総司さんは私のパジャマのボタンを優しく留め直してくれながら、蕩けるような笑顔を向けてくれた。

「私のほうこそ……！」

溢れる愛しさに耐えかねて、私は彼の首にぎゅつと抱きついた。総司さんは愛おしそうに声をあげて笑うと、私を抱きしめたまま、一緒にベッドの上にごろりと寝転んだ。

（ああ、幸せだなあ……）

私は大好きな人の優しく温もりに包まれながら、深い安らぎの中で、多幸感の中、そつと目を閉じたのだった。

【総司視点】

(……ん、朝か)

薄く目を開けると、カーテンの隙間から白んだ光が差し込んでいた。時計を確認するまでもなく、朝食の支度にはまだ早い時間だとわかる。

俺の腕の中にいる華ちゃんに目線を向けると、彼女はまだ眠っていた。起こさないようにそつと身じろぎして、彼女の顔を覗き込む。

(かわいい……)

眠っている表情はまるで子どもみたいで、こんな顔を見られるのは世界中で俺だけなんだと思うと、たまらない気持ちになる。愛しいとか、守りたいとか、そういう言葉では追いつかないくらい、俺は彼女に夢中になっていた。

(俺が君に救われ続けていることなんて、知らないんだろうな)

華ちゃんはどうも、俺にあれこれしてもらうことを申し訳なさそうにしている。恐縮して、遠慮して、「こんなにしてもらっていいの？」なんて顔をする。

でも俺からすれば、してあげていると思ったことは一度もなかった。彼女がそこにいてくれるだけで、俺はとくにもらいすぎているのだから。

——そう、俺の人生は彼女に出会ったことによつて大きく変わった。

生まれてからずっと、何かから逃げていた。宇多川家の次男として生まれた俺には、常に家の名前がついて回った。仕事も、振る舞いも、交友関係も、全部「宇多川としてどうか」という基準で測られた。俺個人なんてどうでもよくて、大切なのは宇多川家という名前だけで、そのことがどうしても窮屈でならなかった。

ただ幸いなことに、俺には出来のいい兄がいた。だから、次男という立場を言い訳に、俺は家を出た。カフェをやりたいと言えば、さほど引き止められな

かった。ある日偶然、通りがかりにコーヒーショップが目に入った——ただそれだけの理由で。本当は、単に外に出ただけだった。

適当な居抜き物件を見つけて、見よう見真似でコーヒーを淹れ始めた。客は近所のおじさんおばさんばかりで、昼過ぎには暇になった。宇多川家では一度も味わったことのない種類の静けさで、悪くはなかった。けれど、どこか満たされないものを感じていた。

——そんなある日のことだった。

ドアベルの音に顔をあげると、見慣れない女性が入ってきた。常連ばかりの店に若い客が来ることは滅多になかった。一つに束ねた髪、着ている服は高級感があるわけじゃないのに清潔で彼女に似合っている。余計なものを削ぎ落としたような静かな佇まいは、まさに清楚、という言葉が相応しかった。

注文を聞いているときも、なんとなく目が離せなかった。

「ホットコーヒーを一つお願いします」

可愛らしい声が、耳の奥まで心地よく響いた。俺はいつも通りコーヒーを淹れて、彼女の前にそつと置いた。

一口飲んで、細い喉がそつと動いた。それから——彼女は顔を上げて、俺の方を見た。

「……美味しいです」

淡い色のリップに彩られた小さい唇が柔らかく弧を描く。俺は、そんな彼女の表情から、なぜか目が離せなかった。

——嬉しい、と素直に思った。自分が淹れたコーヒーで、誰かがこんな顔をするのかと。ずっと宇多川家の次男として、できて当然だと思われてきた。仕事も、振る舞いも、全部「宇多川の人間なら当たり前」で片付けられた。誰かに喜ばれた記憶は、いつも宇多川の名前に向けられていた。

でも今、彼女が笑ってくれたのは——宇多川家とは何の関係もない、ただ俺が淹れた一杯のコーヒーに對してだった。

華ちゃんは、俺が宇多川の人間だなんて、きつと知らない。ただのカフェの店主として、俺に接してくれている。それが——今の俺には、何より心地よくて、嬉しかった。

彼女のために、もつと美味しいコーヒーを淹れたいと思った。彼女が俺のコーヒーを飲んで笑ってくれるたびに、俺の世界が少しずつ色を持ち始めた。

いつの間にか、彼女はカウンターでコーヒーを飲むようになった。そのうち、華ちゃんと名前で呼ぶようになった。そして——クローズ間際の誰もいなくなつた店内で、俺は彼女に自分の想いを伝えた。彼女も同じ気持ちでいてくれて、夢のようだった。

——ああ、俺はこの子を絶対に手放せない。

「ん……」

隣からの可愛らしい寝息に、思考が現実に戻る。俺は薄明かりの中で、愛しい華ちゃんの顔を覗き込んだ。

（安心して寝ちゃって……、可愛いなあ）

この子が笑っていられるなら、俺はなんでもできる。こんなにも誰かのことを想ったのは、生まれて初めてだった。自分がこんな人間だったとは、華ちゃんに会うまでは知らなかった。

鼻先をつんつんと人差し指でつつくと、むう……と可愛い返事が返ってきて、俺はまた顔を綻ばせた。

（今日の朝は……、この前華ちゃんが食べたいって言ってたフレンチトーストにしようかな）

健やかに眠る彼女の頬にキスを一つだけ落として、毛布を肩の上まで掛け直す。それから俺はそつとベッドを抜け出して、下のカフェへと降りていった。



「ん……」

ふわりとバターのいい匂いが漂ってきて、私はそつと目を開けた。昨夜、隣で眠っていた彼の姿はない。

眠い目を擦りながら身を起こすと、ちょうど階段を上がってくる足音が聞こえてきた。誰の足音かなんて、考えるまでもない。慌てて前髪を手櫛で整える間もなく、寢室のドアがそつと開いて、私の大好きな彼が顔を覗かせた。

「あ、華ちゃんおはよう。起きてたんだね」

「おはよう、ございます……!」

(わあ……、今日もかっこいいなあ)

まだふわふわとしている頭で、真っ先に思い浮かんだのはそんなことだった。ちゃんと目が覚めていない私とは違って、総司さんはすっきりした顔をしている。朝からずるい、と思う。

総司さんは軽い足取りでベッドまで来ると、腰を下ろして、私の髪をそつと撫でた。

「……あ、寝癖ついてました？」

「ちよつとだけ。今日も可愛いね、華ちゃん」

(う……、ちゃんと前髪くらい整えておけばよかった)

だらしない寝起きの姿を見られた気まずさと、それでも可愛いと言ってくれる優しさが混ざり合って、頬が熱くなる。

なんとなく視線を合わせられなくて、少し俯きながら手櫛で髪を梳く。総司さんはそんな私の様子を見て楽しそうにふふ、と笑っていた。

「朝ご飯ができたから呼びに来たんだ。華ちゃんの好きなフレンチトーストだよ。……昨日はだいぶ遅くまで付き合わせちゃったけど、起きられそう？」

昨日の情事が頭をよぎって、やっと落ち着いてきたはずの頬の熱がまたじわりと戻ってきた。

「だ、大丈夫、です……！ 今日こそお手伝いしようと思ってたのに、また全部やつてもらっちゃって……」

「いいよ、俺がやりたくてやつてるんだから」

総司さんはあつさりとそう言って、爽やかに笑った。そんな風に言われてしまふと、何も言い返せなくなってしまう。私は頬の熱を誤魔化すように、えいと立ち上がった。

「ふふ。着替えたら下に降りておいで。コーヒー淹れて待つてるから」

総司さんは火照った私の頬にキスを一つ落とすと、そのまま階下へと降りていった。私は彼の唇が触れた頬にそつと手を当てて、ほう、とため息をついた。

（うう……。総司さん、私に甘すぎるよ……）

付き合う前は想像もしていなかった。大切な人に愛されることが、こんなにも幸せだなんて。そのとき、お腹がきゅう、と小さく音を立てた。

「……早く準備しよ」

手早く着替えて、髪を梳かして下へと降りていく。フレンチトーストのバターの甘い香りに、コーヒーの深い香りが混ざり合って、鼻先をくすぐった。

「華ちゃん、早かったね」

カウンターの向こうから、極上の笑みでそう告げられる。思わず頬が緩むの

を感じながら、総司さんの下へ近づく。

「いい匂いなのでお腹すいちゃって……、何か手伝うことがありますか？」

「じゃあ、俺がコーヒー淹れるところ見てもらおうかな」

「ふふ、はい」

カウンターの椅子に腰を下ろし、総司さんがドリッパーにゆっくりとお湯を注ぐ様子を眺める。コーヒーがポタポタと落ちていく穏やかな音が耳に優しく響く。癖のない真っ直ぐの髪、長いまつ毛が影を落としている横顔。ドリッパーを真剣に見つめる眼差しは、本当に絵になる。肘下まで捲られた袖から覗く逞しい腕が、細くお湯を注ぐたびにしなやかに動いていた。

「ふふ、華ちゃんはコーヒー淹れるところ、見るの好きだね」

（どつちかと言うと、総司さんを見るのが好きなんです……）

とは、さすがに恥ずかしくて言えなかったので、にこつと笑って誤魔化し

た。

「だって、総司さんの淹れてくれるコーヒーが世界で一番美味しいんですもん」
元々紅茶派だった私は、総司さんの淹れてくれるコーヒーのおかげで、今ではすっかりコーヒー派になってしまった。

「……華ちゃんはいっつもそうやって言ってくれるよね、嬉しいな」

総司さんはコーヒーを淹れ終わると、戸棚の奥から二つのマグカップを取り出した。縁がピンク色と青色の、お揃いのカップ。一緒に買い物に行ったとき、二人で選んだものだった。

「お待たせ。それじゃあ食べようか」

はい、と返事をしたとき、カウンターに置いていた私のスマホが短く震えた。手に取ってちらりと画面を確認する。職場の人からだった。せっかくほわほわと温かかった気持ちだが、少しだけ冷める。すぐに画面を消して、スマホを

ポケットにしまった。

「……大丈夫だった？」

顔を上げると、総司さんがこちらを見ていた。いつもと同じ穏やかな声だったけれど、その目がほんの一瞬——何かを測るように、少しだけ鋭くなったと思ったのは私の気のせいだろうか。

「え、つと……。その」

私が言葉を詰まらせているうちに、探るようだった琥珀色の目が、ふつと柔らかな色に戻る。

「急ぎの用事もあるだろうし、遠慮なく連絡返しちゃっていいからね」

（やっぱり、気のせいだよな）

総司さんがいつもの空気に戻ったのに合わせて、私も少し明るい声を出す。

「大丈夫、です……！ すみません、食べましょうか。今日のコーヒー、いつも

よりいい香りがします」

「気づいてくれて嬉しいな。華ちゃんは少し深煎りのほうが好きでしょ？ 今日
はほんの少しだけ蒸らし時間を長くしてみたんだ」

「わ、嬉しいです！ ……美味しい！」

口に含んだ瞬間、ほんのりとした苦みの奥に丸い甘さが広がる。私の好みを
ちゃんと覚えていてくれたことに、胸がじんわりと温かくなった。

「よかった。今日の夜もうちに来る？ 明日は俺も休みだから、泊まっていっ
たら一緒に出かけられるよ」

「そうですね！——」

さっきの微妙な空気のことを、温かいコーヒーと一緒にするりと胃の底に落
ちていく。フレンチトーストはふわふわで、コーヒーは美味しくて、向かいに
は好きな人がいる。カフェの開店までの穏やかな時間を、静かに噛み締めたの

だった。



（あー……、昨日のデートも楽しかったなあ）

まだ人のまばらなオフィスでパソコンの起動を待つ。私はその間、意味もなくマウスを動かして、昨日のデートを思い返して顔がにやけるのを必死で抑えていた。

先週末はカフェの営業が終わった頃に総司さんの家へ行つて、そのまま泊まりした。翌日は二人で買い物デートをして、色違いのお揃いのブランケットを選んだ。総司さんが「会えない日も華ちゃんを感じられるでしょ」と言うから、私のは淡いピンク色、総司さんには彼のいつもつけているエプロンと同じ

緑色のものを選んだ。次に総司さんの家に行ったとき、一緒に使うのが今から楽しみでたまらない。

「柏木さん、おはよう」

後ろから声をかけられて、思わず肩が跳ねる。振り向くと、多田先輩がいた。

「……おはよう、ございます」

少しだけ俯いて視線を逸らす。だけどそんな私の様子にはまるで構わず、多田先輩はするりと私のデスクの横に立って、耳元に口を寄せてきた。至近距離で囁かれる感覚に、背中がひやりとした。

「週末メッセーじ送ったのに、気を使わないでって言うからさ。結局、買ってきたやつ。ほら、俺先週、福岡に出張行ってたじゃん？ マグカップ、よかつたら使つてよ。他の人には買つてないから、内緒ね」

言い終わる前に、多田先輩は私のデスクの引き出しを勝手に開けて、マグカップをすつと押し込んだ。

「……あ、多田先輩！ それは――」

言葉を返す間もなく、多田先輩は自分のデスクへと戻っていつてしまっていた。

（……どうすればいいの、これ）

引き出しの中に突っ込まれたマグカップを見つめながら、私は小さくため息をつく。

多田先輩は私の三つ上の先輩だ。入社当時から一番年の近い先輩として、業務についてわからないことを聞く機会が多かった。だけど、それだけの関係だ。出張のお土産を、他の人には内緒で、引き出しに直接しまわれるような間柄では、断じてない。

だけど——彼から直接好意を伝えられたわけではないし、もしこれが私の思い違いなら、指摘すること自体が的外れになってしまう。そう思うと、どうしても言葉が出てこなかった。

実は先週末、総司さんの家に泊まっている朝にも多田先輩からメッセージが届いていた。お土産なんて気を使わないでください、と言ったらこうなった。

(……いざとなったらちゃんと言おう。私には総司さんがいるんだから)

気持ちを切り替えようと、私は手元の資料に目を落とした。先月分の経費精算書だった。

(あ、この集計……、やり方がわからない)

総務の書式が先月から変わったのだ。前の書式なら自分で処理できていたけれど、新しいものは初めてで、手順がわからなかった。自席でしばらく首を傾げてから、私は仕方なく立ち上がった。

「多田先輩、少しよろしいですか。この経費精算の新しい書式、やり方を教えていただけますか」

「あ、もちろん。ちょっと待つて」

多田先輩はすぐにパソコンから目を離して、私のデスクまでやってきた。隣に立つて画面を覗き込む距離が、少しだけ近いような気がしてもやっとする。

(……いや、私が過剰なだけかも)

「ここはね、まずこっちのシートに入力して——うん、そうそう。次にこっちに反映させる感じ」

「なるほど、ありがとうございます。じゃあここは——」

「あ、ちよつと貸して」

多田先輩は断りなしに私のキーボードに手を伸ばして、さっさと入力してしまつた。

「はい、これで完成。入力、ちょっとミスってたよ。書式が変わると誰でも最初は戸惑うし、今回は俺がやっておいたから。課長への提出もこっちでしておくね」

「え、でも——」

「いいって、気にしないで。困ったことがあればいつでも言つてよ」

そう言つて、多田先輩は自分のデスクへ戻つていった。

（……助かった、とは思うけど）

これで私は多田先輩に、ひとつ借りを作ってしまったことになる。それがなんとなく、居心地が悪かった。

（ようやくお昼だ……）

社員食堂で日替わり定食のトレーを持って席に着き、私はようやく一息ついた。何気なくスマホを開いた瞬間、ピコン、とメッセージが届く。

『総司・華ちゃんお疲れ様！ 昨日のデート、楽しかったね。次は華ちゃんと江ノ島行ってみたいな、夕暮れ時の海が綺麗らしいよ』

スマホを開いた瞬間にメッセージが来るなんて、タイミングが良すぎてつい笑顔になってしまう。ランチタイムのカフェは一番忙しい時間帯のはずなのに、それでも連絡をくれる。そういうところが、たまらなく好きだ。

（江ノ島もいいな……。総司さんと旅行、行ってみたいなあ）

夕暮れの海を総司さんと並んで眺めているところを想像して、自然と顔が緩む。彼と旅行に行ったら楽しいだろうな——なんて、少し先の未来を思い描いたときだった。

「柏木さん、隣いい？」

確かめる間もなく、多田先輩は勝手に私の隣に腰を下ろした。

「あー、生姜焼き美味しそう。俺も日替わりにすればよかったな。どうしても今日はラーメンの気分だし——つか柏木さん、最近なんか雰囲気変わった？　なんか、明るくなったよね」

「……そうですか？」

「うん。なんか、いいことあった？」

失礼にならない程度に相槌を打ちながら、生姜焼きを口に運ぶ。この前総司さんが作ってくれたビーフシチューの方が断然美味しかったな、と心の中で思いながら、黙々と食べ進めた。

多田先輩は私が相槌しか打たなくても、特に気にした様子もなく話し続けた。出張先での話、他の部署の噂話、週末に行ったというラーメン屋の話。聞いていなくても会話が成立するのは、ある意味楽だったけれど、早く自分の席

に戻りたいとも思った。

年の近い先輩として、たまにランチを一緒に取ることはあったけれど、最近はその週に二、三回になっている。今日のように、私が一人にいるところへ当然のように入ってくる。嫌だと思うけれど、角を立てたくなくて、いつも流してしまふ。

(……早く、食べ終わろう)

私がペースを上げてすぐに食べ終わると、多田先輩が「あ、もう行くの？ 早いね」と言った。その声がどこか残念そうで、私は曖昧に笑いながらトレイを持って立ち上がった。自席に戻る背中に、なんとなく視線を感じた気がして、足を速めた。



水曜日は、カフェの定休日だ。だから火曜日の夜はだいたい総司さんの家に行って、一緒にご飯を食べてお泊まりするのが、最近の私たちのお決まりになっている。

いつものようにカフェの扉を開けると、ドアベルがカランと小気味良い音を立てる。その音に顔を上げた総司さんが、柔らかく目を細めて微笑んだ。

「華ちゃん、今日もお疲れ様。ご飯、もうできてるよ。今日はロコモコ丼にしてみたんだ。この前テレビ見て食べたと言ってたでしょ？」

「わあ……！ 覚えてくれたんですか？」

「華ちゃんが言ったことは全部覚えてるよ」

「……っ」

私を見つめる優しい瞳に、次の言葉を見失った。さらりとこんなことを言え

る人なのだ、この人は。

カウンターには食器が二つ、きちんと並べられていた。先日デートで二人で選んだ、お揃いの器だ。総司さんが作ったロコモコ丼は湯気をたてていて、仕事終わりの空きつ腹がくうつと情けない音を立てた。

「いただきます……！ ……んっ、美味しい！ お肉やわらかい……」

「よかった。グレイビーソース、一から作ったんだよ」

「え、そこから……!?」

思わず声を上げると、総司さんは真っ直ぐに私を見て目を細めた。

「それくらい当然だよ。華ちゃんに食べてもらうんだから」

「あ、ありがとうございます……」

（や、優しすぎる……！ こんなに甘やかしてもらっていいのかな）

付き合い始めてからもうしばらく経つのに、いまだに慣れなくて、私はごま

かすように口コモコ井を口に運んだ。

「そ……っ、そういえば！ この前の休みに行った水族館、あのクラゲのコーナーがよかったですね」

「あー、華ちゃんずつと見てたよね。クラゲのぬいぐるみ、やつぱり買ってあげればよかった」

「だって、水族館のチケットだつて出してくれたし。あんな高いぬいぐるみ買ってもらうなんて、申し訳ないですよ……！」

「そんなの気にしなくていいのに」

「そういうわけには……」

「華ちゃんはそういうところ、ほんと変わらないね」

呆れたような、それでいて愛しそうな顔で総司さんが笑う。そのとき、カウンターに伏せて置いていた私のスマホが、ブー、と鳴った。

夜に私に電話をかけてくる人なんて、総司さんを除いたらあの人しかない。
い。

「……華ちゃん、電話鳴ってるよ？　俺は気にしないでいいから、出て大丈夫だよ」

私が、出たくないのだ。どうせ、あの人に決まってる。一応、スマホをちらりと確認してみる。

（……やっぱり多田先輩だ）

また食事の誘いだろうか。気持ちに沈んでいくを感じながら、私は再びスマホを裏返した。

「……フリーダイヤルからだったので、迷惑電話かもしれませんね。きっと用事があればまた掛け直してくるでしょうし、大丈夫です」

（ちゃんと、笑えてるかな）

総司さんはじつと私を見つめていた。琥珀色の瞳が一瞬だけすうつと細められる。嘘をついてしまったことへの罪悪感で、胸がきゅつと痛んだ。

だけど、心配をかけたくなかった。別に何かされているわけでもないし、まあちよつと距離は近いかもしれないけれど、先輩後輩の関係だ。私が気にしすぎているだけかもしれない。

「……そう、なんだね」

なんだか、含みのある言い方だった。総司さんは、私から視線を逸らさない。その琥珀色の瞳に、全てを見透かされてしまいそうで息が詰まる。

総司さんが立ち上がると、知らないうちに握りしめていた手がゆつくりとほどけた。背を向けた総司さんがキッチンへ向かうのを、私はただ目で追った。

「食後のハーブティーを淹れるね。今日は泊まっていくでしょ？」

「……は、はい」

（……追及、されなかった。絶対、何かあるって気づいてたよね）

けれど、ハーブティーを入れて再びカウンターに戻ってきた総司さんはいつもの通りの様子だった。温かいハーブティーを飲んでいるうちに、張り詰めていた気持ちが少しずつ溶けていく。総司さんはもう何も聞いてこなかった。それがありがたいような、かえって申し訳ないような、複雑な気持ちが胸の奥にそっと残った。

「よし、これでいいかな。華ちゃんの髪はさらさらで気持ちいいね」

お風呂上がり、いつものように総司さんが私の髪をドライヤーで乾かしてくれた。仕上げにヘアミルクまで丁寧塗りに込んでくれる大きな手のひらが心地よくて、私はベッドの端でそっと目を閉じる。

「……さて、と」

ドライヤーを置いた総司さんが、向かい合うように私の前に座った。そつと手を差し伸べられて、指を絡めるように握られる。いつもならこの流れで、自然にキスが始まるのに。今日の総司さんは、ただ私をまつすぐに見つめていた。

恥ずかしくて視線を逸らそうとすると、繋いでいない方の手が顎に添えられて、そつと正面を向かされる。さほど力が入っていないのに、なぜか抗えなかった。恐る恐る総司さんの目を見上げる。

「華ちゃん」

いつもと同じ声で、私の名前を呼んだ。なのにどこか、子どもを諭すような静かな響きだった。

「なん、ですか……？」

その琥珀色の瞳にじつと射すくめられて、息が詰まる。あ、さっきの話はまだ終わってなかったんだと悟った。総司さんは、私を逃がしてくれたわけではなかったのだ。

「俺に隠し事してるよね？」

（……やっぱり）

心臓がどくりと跳ねた。すぐに多田先輩の顔が脳裏をよぎる。

（でも、多田先輩はただの職場の先輩だし、やましいことは何一つないし……。言い寄られてるって確信があるわけでもない）

心配をかけたくなくて黙っていた、ただそれだけのこと。だから、私は言っ
た。

「……してない、です」

言い切ったとき、また部屋のローテーブルに置いていた私のスマホが鳴っ

た。

ブー、ブー、と。今度はなかなか鳴り止まなかった。総司さんの視線が、私の顔から、振動するスマホへと、ゆつくりと移動した。静かな部屋の中で、スマホの振動音だけが、やけにはつきりと聞こえる。

「……」

私は、動けなかった。またフリーダイヤルだと嘘をつかなくちゃいけないんだろうか。でも、この状況で多田先輩の名前を頑なに隠し続けることこそ、まるで本当にやましいことをしているようで――。

私が悩んでいるうちに、スマホは鳴り止んだ。重たい静寂が部屋に満ちる。

「どうして、電話に出ないの？」

その声に、私を咎めるような響きは一つもなくて、だからこそ、咎められているような気がしてしまう。

「……っ」

何も言えなくなってしまうた私に、総司さんの親指が、繋いだ手の甲をゆつくりとなぞる。

そのときだった。三度目の振動音が、スマホから響いてきた。

ブー、ブー、ブー。私の肩が、自分でも気づかないうちにびくりと震える。反射的に総司さんの手を強く握り締めてしまつて、しまったと思つたときにはもう遅かった。

「……華ちゃん」

総司さんの琥珀色の瞳が、すうっと細くなる。いつも優しげに私を見つめる総司さんとは違う雰囲気、ぞくりと身体が震えた。

「そうじさ……、んむうッ!?♡」

どろりと濁った瞳が近づいてきたと思つたら、何か言う前に唇を塞がれてい

た。

輪郭をじつとりとなぞる舌先の生々しい刺激に、ほんの少しだけ口を開いてしまふ。その隙を逃さずに、ぬるりとした熱い舌が口内へ強引に侵入してきた。

「……んんッ!?♡ んう……ッ、んむう……ッ♡」

総司さんの舌は、私の口内を最奥まで犯すように、深く、激しくかき回してくる。頭が痺れるような、あまりにも深い口付けに酸素が足りなくなり、目の端に生理的な涙が滲んだ。

だんだんと息が苦しくなってきた、彼の胸をトントンと叩いたけれど、逆に後頭部を大きな手でがっちり固定され、身動きを封じられてしまう。

（どうして、こんなキス……ッ♡ 息できない……ッ、くるし……ッ♡）

いつの間にかスマホの着信音が鳴り止んでいたけれど、もはやそのことを気にしている余裕はなかった。もう本気で無理だと思ったそのとき、ようやく総

司さんの唇がゆつくりと離れた。

「……は、あッ♡ そうじさ……♡」

けれど、息を継ぐ間もなく、再び強引に唇を塞がれる。どうして、と言わせてもらえないまま、ベッドへと押し倒されてそのまま身体が慣れ親しんだシーツに沈んだ。

「……んむうッ♡」

総司さんは私の両手首をひとまとめに掴むと、頭の上へと組み伏せるようにして拘束した。

腕を動かそうと思つて力を込めてみたけれど、彼の逞しい腕の前ではびくともしなかった。私と彼の絶対的な体格差を見せつけられて、じわじわと身体の自由を奪われていく恐怖が這い上がってくる。なのに、不思議と逃げたいとは思わなかった。

「んんん……ッ♡ん、ふう……ッ♡んんん……ッ♡」

じたばたと動こうとする足を、総司さんの長い足が絡め取るようにして器用に封じ込める。

そのまま割り開かれた太ももの間に彼の固い膝頭が差し込まれた。パジャマの薄い生地越しに、秘部をこりッ♡と膝で挟るように押し付けられて、ぐちゅり♡ というやらしい水音が響いてしまう。

（あ……ッ、やだわたし……♡ どうしてこんなに濡れて……ッ!?♡）

いつも私を優しく蕩かす彼の愛撫を学習してしまっている私の身体は、こんな乱暴なキスにすら敏感に反応してしまう。恥ずかしいはずなのに、下腹部からはとめどなく愛液が滴り落ちていく。

「や、あ……ッ♡」

「……は、あッ。華ちゃん、もうこんなに濡れてるよ……?♡」

「おとお……ッ♡ 恥ずかしいから、あ……ッ♡ やあッ♡ んう……ッ♡」
 「まだキスしかしてないのに、こんなにいやらしくお股を濡らしてるのは華ちゃんだよな？」

いつもの総司さんは絶対に言わないだろう羞恥を執拗に煽るような言葉に、顔がかあつと熱くなる。

「……ッ！♡ そ、れは……ッ♡ ア……ッ♡」

ぐっちゅ……ッ♡ ぐっちゅ……ッ♡ と水音をわざと響かせるように膝頭でクリトリスを押し潰される。何か言い返そうとするたびに、甘い刺激に腰がびくびくッ♡ と震えて、反論は掠れた吐息に溶けていった。

「恥ずかしいね……？ 激しいキスされて、膝でぐりぐり……ッ♡ ってクリ潰されるだけで感じちゃうんだ。華ちゃんってそんなにいやらしい女の子だっけ？」

「あ、やだあ……ッ♡」

煌々と蛍光灯が灯った眩しい室内。総司さんは私を片手で頭の上に縫い付けたまま、もう片方の手で、パジャマのボタンを上から乱暴に引き剥がしていく。いつもは必ず電気を消して薄暗がりの中で優しく抱いてくれたのに、こんな明るい場所で、無防備な素肌を晒されるのは初めてのことだった。

「そうじさ……ッ♡ お、おねがい……ッ、電気、消してえ……ッ♡」

「やーだ♡」

半泣きになりながら縋るように訴えた私を、総司さんが意地悪い笑顔で一蹴する。逃げ道を完全に塞がれ、私はただ、彼に身を委ねることしかできなくなっていた。

ブラジャーをたくし上げられ、遮るもののなくなった私の胸も、ピンク色の乳首も、全てが総司さんの眼前に晒される。総司さんは、情欲に歪んで恍惚とし

た表情で、私の剥き出しの乳房をじっと見つめていた。

(み、見ないで……ッ♡ そんなに近くで……ッ、やだやだッ♡)

羞恥に押し潰されそうで目頭が熱くなるのに、見つめられている皮膚の表面がジリジリと熱を帯びていく。恥ずかしいからやめてほしいという理性を裏切るように、なぜか下腹部がじんじん……ッ♡ と脈打ち、身体の芯が切なく疼き始める。

「や、だあ……♡ やあ♡ みないでッ♡ みないでよお……♡」

「どうして？ 全部綺麗だよ。ぷつくりと上を向いて小さく主張する乳首も、乳輪周りのつぶつぶも……、華ちゃんのいやらしいところ、全部見える。……はあッ♡」

ぷつくり♡ と主張するピンク色の突起が、総司さんの熱い口内にすっぽりと吸い込まれた。

「ひいッ♡ 舐めちゃ、あゝゝ……ッ!!♡」

ぢゅうッ♡ と強い圧で吸い上げられ、そのまま舌で左右に乳首を転がされる。それだけで、ビリビリ♡ とした鋭い快楽が背筋から全身へと駆け巡った。

ぢゅるるッ♡ ぢゅう……ッ♡ ぢゅる……ッ♡ ———カリッ♡

「……ゝゝッ!?!♡♡」

突然、先端に走った尖った快楽に、腰がびくんッ♡ と激しく跳ね上がった。脳裏でぱちぱちと火花が弾ける。

「ははっ、すごい反応。ちよつと歯を立てて噛んだだけなのに。華ちゃん、このくらい強い方が好きだったの?」

「えッ!?!♡ やッ、そういうわけじゃ、……ゝゝッ♡♡ ひああッ、うゝゝゝ……ッ♡」

（あッ♡ なにこれなにこれッ♡ こんなにきもちいの知らない……ッ♡

つよいのに、痛いどころか……ッ♡　びりびり……♡　って気持ちよくなっ
ちやううッ♡)

歯を立てられて、きゅつと歪に身を固くした乳首を口内に閉じ込めたまま、
総司さんの舌がころころ♡　と執拗に弄ぶ。

おっぱいを責められるたびに腰が勝手に浮いてしまい、自分から総司さんの膝
に秘部を擦り付けるように押し付けてしまっていた。

「ふふ、やらしいな。おまんこ触って欲しくなっちゃった？」

「ち、ちが、ああ……ッ♡　こしがッ、かつてに、いッ♡　ひうッ♡　ああ
あッ♡」

「びくびくすごくなってきたね？　胸だけでイけるかな」

総司さんは片方の乳首を口に含んで吸い上げながら、私を拘束しているのと
は反対側の手で、もう片方の乳首を摘み上げた。そのまま爪先でカリカリッ

♡ と引つ搔かれると、もうダメだった。

「……………ッ!?♡ あああッ♡ カリカリやら、あゝゝッ♡ もッ、むりいッ!!♡」

おっぱいへ直接突き刺さるような強烈な快感と、それによって跳ねる腰が彼の膝にクリトリスを何度も激しく擦りつける。自ら快感を増幅させるような形になってしまい、お腹の奥がじんじんッ♡ と熱くなっていく。脳裏でばちん♡ ばちん♡ と火花が弾け、膣がぎゅううッ♡ と締まっていく。

「あ♡ やらやら、あッ♡ ……ゝゝおッ♡ イ、ック♡ イっちゃ、あ……ッ♡ おゝゝ……ッ♡」

ビクビクビクッ♡ ふしッ♡♡ ふしゅッ♡♡

身体が大きく跳ね上がった直後、内側から熱い飛沫が勢いよく噴き出した。ショーツがじつとりと濡れていくのがわかったけれど、もうどうすることもで

きない。

溢れ出た染みはどんどん広がって、瞬く間にパジャマのズボンまで変色させ、そしてお股にびったりと当てられていた総司さんの膝頭までもびしょびしょに濡らしていった。

「ふう……ッ♡ は、あ……ッ♡ わた、し……ッ♡ やら、あ……ッ♡」

「華ちゃん、アクメしてお潮まで吹いちゃったんだ？ 可愛いなあ。じゃあ、びしょびしょになった下、脱いじゃおうね……♡」

総司さんが私の両手首を縛り付けていた腕をようやく解いてくれたけれど、もう抵抗する気力なんて微塵も残っていなかった。むしろ、激しい愛撫に頭の芯はとろとろに溶けていて、もつともつと彼の手でめちやくちやにしてほしいという淫らな本能が全身を支配していくようだった。

「あ……ッ♡」

総司さんは私のパジャマのズボンを、ショーツごと手早く引き抜いた。潮をたつぷりと吸い込んで重たくなった衣類が、ベッドの下へと無造作に放り捨てられる。

「よいしょ、と……」

「……えッ!?♡ や、やだぁッ♡ほんと、にい……ッ♡」

解放されたと思ったのも束の間、総司さんはおもむろに私の両膝を掴むと、膝を大きく割り開いて、股の間に自身の顔をぐいっと近づける。蛍光灯の光の下で、自分の一番恥ずかしい場所が晒されていることに、羞恥は限界に達していた。

（やだやだ……ッ♡ そんな明るいところでおまんこ見ないでえ……♡）
すんすんッ♡ と鼻先を押し当てて匂いを嗅ぐような仕草をされ、恥ずかしくて泣きそうだった。いくらなんでもそんなことされるのは無理だと、半泣

きになりながら彼の頭を両手で必死に押し除けようとする。けれど、絶頂を迎えたばかりの脱力した身体にはろくに力が入らず、大きな彼の頭を押し返すことなんて到底できなかった。

「華ちゃんのおまんこ、ピンク色で可愛い……♡ 愛液でぬめぬめ光っていやらしいね……♡」

「い、言わないでえ……♡」

総司さんが親指でふつくらとした恥丘を左右に割り開くと、にちゅう……♡ という水音とともに愛液が糸を引く。そのまま弄ぶようにおまんこを左右に押し広げたり閉じたりされるたびに、くちゅ♡ にちゃあ♡ と水音はひどくなるばかりだった。

「すっごいね……。とろお……ッ♡ ってえっちな汁がこぼれてきたよ。あ、溢れちゃうね……。♡」

お尻の割れ目へと伝い落ちていく熱い蜜を、れろ〜……ッ♡ と舐め上げられて、膣がぎゅッ♡ と締まる。とぷとぷ……ッ♡ とさらに溢れ出す愛液を総司さんが丁寧な、吸い上げるように舐め取っていく。

「あ、うう〜……ッ♡ そんなとこッ、舐めないでえ♡」

「……ああ、ごめんね。華ちゃんの大好きなクリトリスが寂しがってるよね」

「……〜やッ♡♡♡ ちがッ、あああッ♡♡ お〜……ッ!!♡♡」

ぢゅうううう……ッ♡♡♡ ぢゆるるるッ♡♡ ぢゆるるるッ♡♡

（あ〜……ッ♡♡♡ 今クリ吸われたらあ……ッ♡♡ ぢゆるるるッてえ……♡♡ き

もちよくておかしくなるう♡♡♡ 甘イキ止まん、あ……ッ♡♡）

ぷっくり♡♡ と勃起したクリトリスを前触れもなく強く吸い出されて、ひとりでに腰がガクガクガクウ……ッ♡♡ と痙攣する。

「……はあッ、クリトリスびくついてる。あー……、可愛い。このままもつとア

クメキメようか……♡」

「ひああッ♡ おくく……ッ!!♡♡」

(きもちよすぎて変な声止まんない……ッ♡ あ、やだやだッ♡ クリトリス吸ったままちろちろ舐めないでえッ♡)

ぢゅるるッ♡ れろれろれろッ♡ ぢゅるるッ♡ ぢゅるるッ♡

総司さんはクリトリスを口内に吸い上げて舌先で転がしながら、ナカから溢れ出てくる蜜を指先で掬い取った。そして、指先でくると蜜口の形を確かめたあと、躊躇いなくナカへと割り入れ、奥深くへと指を侵入させた。

——ぬぷぷ……ッ♡

「……ひあ、あッ♡ りようほ……ッ、らめ、らめえッ♡ ああッ♡ や、あくく……ッ♡」

ぢゅるるるるッ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡♡♡

クリトリスを吸われながら同時に膣内を掻き回されるのは、暴力的なまでの気持ちよさだった。

いつもなら私の様子を窺いながら、私が耐えられるだけの快楽を優しく与えてくれた総司さんだったけれど、今日の彼は違った。私の弱点を知り尽くしたその指は、膣口からすぐ近く、そこだけざらざらとして他よりも気持ちいいその場所を的確に捉え、指の腹で何度も激しく擦り上げていく。

「しよれッ♡ イグッ♡ イつぢやうう、うッ♡ おッ♡ おおッ♡ ツあああゝゝ……!!♡」

必死にシートを掴んで、腰をビクビクッ♡ と跳ねさせながら絶頂の波に呑み込まれる。

はあはあど熱い息を繰り返し、まだ身体がガクガクと震えているというのに、まだ許さないとでもいうように、容赦なく指が蠢き出す。果てたばかりで過

敏になりすぎた身体が、その刺激にまた甘く疼き始めるのを感じて、私はもうおかしくなりそうだった。

「やああ……ッ!?♡ そうじさ……ッ、イってる♡ イってるからあッ♡」

「そうだね。いやらしくアクメして可愛いね……♡ 華ちゃんのまんこ、ぎゅうッ♡ って締めつけてきてすごいよ」

（ちがうッ♡ ちがうのにいッ♡ 全然やめてくれないッ♡ きもちよすぎておかしくなる……ッ♡ きもちいいのッ、戻ってこれないいい♡♡）

ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡ ぢゅうううッ♡ ぢゅるるッ♡

「あ……ッ!!♡♡ やらやらあッ♡ しょれッ♡ つづけぢゃッ♡ や……ッ♡」

あまりの快感の凄まじさに半狂乱になりながら、イヤイヤと首を振るけれど、総司さんはそんな私の乱れた姿を恍惚とした表情で見つめるだけで、ちっ

とも手を緩めてくれない。クリトリスを深く吸い上げたまま、ビクビクッ♡と激しい痙攣が止まらないナカなんてお構いなしに、トントン♡と甘く、執拗に私の一番弱いところを突き上げ続ける。

もうこれ以上は無理だと心が悲鳴を上げているのに、私の身体はどこまでも快感に従順で、抗う余裕なんてないまま、さらなる絶頂へと突き落とされていった。

ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡　ぢゅゅゅゅッ♡　ぢゅゅゅゅッ♡

「おぅ……ッ♡　またぁッ♡　くるッ♡　きちや、あ、ぐうう……ッ

♡♡」

ガクガクガクッ♡♡

さっきよりもさらに巨大な快樂の波が押し寄せてきて、身体中に限界までぎゅううッ♡と力が入る。頭のでっぺんからつま先までが硬直した直後、堰

を切ったように一気に身体が弛緩していった。ドクドクと鳴る心臓から、沸騰した血液が燃えるような熱さで全身を巡っていく。

「……………ッう♡ ……………ッ♡ は、あ……………ッ、はー……………ッ♡」

ようやく総司さんの指が引き抜かれた。引き抜かれるときの刺激にすら腰が跳ねそうになりながら、私ははあ……………ッ♡ と重たい息を吐き出す。ぎゅつと目を閉じ、あまりに深すぎた絶頂の余韻を少しずつ逃していくことで、私の頭の中によりやく、ほんの少しだけ思考を巡らせる余白が戻ってきた。

「そうじ、さ……………ッ♡ どうして……………??♡」

涙目になりながら頬を上気させて、私は総司さんを見上げる。彼の琥珀色の瞳を見つめても、彼が何を考えているのかはわからなかった。

「……………俺、知ってるよ」

「……………え？」